

ジェンダーの葛藤：「黄色い壁紙」と『ねじの回転』比較

田中敬子

Henry James (1843~1916) の *The Turn of the Screw* は1898年に出版された。この作品は彼の長い作家歴のなかでも円熟の域に達した頃に書かれた中編である。一方Charlotte Perkins Gilman (1860~1935) の “The Yellow Wallpaper” はその6年前の1892年、雑誌 *The New England Magazine* に掲載された。ギルマンは女性の地位向上のために尽くした闘士であり、ジャーナリスト、作家としても活躍したが、自らはまず社会学者と考えていた。国際的に評判をとった1898年の *Women and Economics: A Study of the Economic Relation Between Men and Women* を始めとして彼女の著作は多岐にわたるが、短編「黄色い壁紙」執筆は彼女の経歴のなかでは比較的初期にあたる。彼女のフィクションはユートピア小説 *Herland* (1915) を筆頭に、ユーモアを込めながらも、女性が当時おかれていた社会的立場とその改革を念頭に書かれたものがほとんどである。『ねじの回転』が文学のプロとしての自負を持ち、心理的リアリズムの巨匠といわれた作家の作品であるのに対し、「黄色い壁紙」は社会学者、ジャーナリスト、作家であるフェミニストが自らの体験をもとに社会的プロテストを込めて書いた作品である (Karpinski, “Intro” 9)。ジェームズは1886年からほとんど英国で暮らしており、ギルマンの「黄色い壁紙」に関心を払ったという証拠はない。『ねじの回転』執筆のきっかけは、友人たちの集まりでたまたま幽霊話になったときに聞いたごく断片的なエピソードであったという (*The Art of the Novel* 169-70)。またギルマンの伝記にヘンリー・ジェームズが言及されることもなく、彼らがお互い直接の影響を受けた様子はない。

『ねじの回転』は出版当時から話題になり、現在に至るまで多くの批評家はその解釈についてさまざまな議論を闘わせている。一方ギルマンの「黄色い壁紙」は発表時拒絶的反応が多く、1920年になってやっと、当時の文壇の大御所であったWilliam Dean Howellsが編集した *Great Modern American Stories* に再録された。ジェームズの『ねじの回転』は単なる幽霊話ではすまない恐怖が評判となり、たとえばVirginia Woolfが “That courtly, worldly, sentimental old gentleman can still make us afraid of the dark” (180) という感想を述べたのも肯定的評価としてである。それに対しギルマンの「黄色い壁紙」はハウエルズをして “terrible” といわせたが、彼はそこに魅力は感じながらもまさにその恐ろしさが読者の反感を招くことを危惧し、ギルマンが望んだように *Atlantic Monthly* に掲載されるよう強く働きかけることはしなかった (Karpinski, “When” 214-15)。結局「黄色い壁紙」は『ニューイングランドマガジン』に掲載されたが、それを読んだある読者の感想 “Such a story ought not to be written. . . . It was enough to drive anyone mad to read it” (YW xv) に代表されるように、読者の反応は概して否定的であった。この作品が文学作品としてフェミニストたちにより再評価されるようになったのはよう

やく1970年代になってからである (Hedges 223)。

このように上記2作品は発表当時から全く違う反応を呼び、作者どうしお互い交流もない別々の作品であるが、当時の社会のなかでの女性の地位、女性が作者となるということについてなど、これらの作品の比較によって明らかになる問題点も多い。以下、2つの作品の執筆当時の社会背景、作品の構造、ヒロインの境遇、苦境からの脱出法などを比較しながら、2作品から共通して浮かび上がる当時の女性の問題、および文学作品のジェンダーについてのジェイムズとギルマンの姿勢を検討してみたい。

1

ギルマンとジェイムズの作品がそれぞれ発表された1890年代はアメリカの金ぴか時代と呼ばれる経済的繁栄の1870-1880年代の続きにある。この時代は1890年のフロンティア消滅宣言、1892年の人民党結成、労働運動の激化など、一種の閉塞感が生まれ資本主義経済のどん欲さが露呈してきてはいたが、1893年のシカゴ万博の成功に見られるように産業の興隆はまだ続いていた。一方1890年には全米婦人参政権協会ができ、それまでも続いていた女性参政権獲得運動が継承されたが、その活動は上流階級の女性中心に偏り、必ずしも活発ではなかった。ギルマンも知己を得たセツルメント運動の指導者ジューン・アダムズ、黒人の地位向上、リンチ阻止運動にかけたアイダ・B・ウェルズ、アナキストのエマ・ゴールドマンら、個々にめざましい活躍をした女性はいしたが、女性地位向上のための全国的、全階級的な運動は低調であった。

ギルマンのフェミニストとしての社会での活躍の華々しさに比べると、17才年長のジェイムズは象牙の塔に閉じこもるお上品な保守的作家の印象がある。事実1881年の*The Portrait of a Lady*では、バイタリティがあって親切だがお節介で無神経な職業婦人が登場し、1886年出版の*The Bostonians*では女性参政権運動家が揶揄の対象になっている。しかしジェイムズはヴィクトリア朝のお上品さを残しながらも女性を比較的予断や偏見なしに観察し、その可能性について考える自由さを持っていた。彼はますます強固になる資本主義社会に敏感で、金権と女性の関係を小説化することが多い。マーサ・バンタは『アメリカ文学のなかの女性』第3章で、ジェイムズは国家として成長したアメリカとその豊かさを所有しようとする男の関係がアメリカという国の女性的属性を際立たせることに気づき、女性の運命を観察することでアメリカの本質を見極めようとしたのだと述べる(86)。確かにジェイムズの小説のヒロインたちは当時の社会のなかで Isabel Archer や Minnie Theale, Kate Croy のように、資産があって自分の人生を十二分に生きようと決心していたり、または自分の人生の夢を実現するために知力をふりしぼって金を得ようとしたりする。たとえ男の犠牲になる場合でも盲目的な自己犠牲とは違った、彼女たちなりの理由を見つけようとする。このように独立心旺盛で個性的な女性たちはこの時代の典型的中流、または上流婦人とは異なっている。

W.D.ハウエルズは1894年出版の*A Traveler from Altruria*という半ば風刺、半ばユートピア小説といった趣の作品のなかで当時の「レディ」の日常生活に触れている。彼女たちは何もせず、教養があり、社交に「忙殺」され(104)、神経的に参って病気がちになり、薬を飲んで過ごす

(108)。一方彼女の夫たちは仕事に追われ、夏の避暑地に妻子を送りだし、普通は週末だけ会いに来る程度の暇しか得られない(35)。ここではアメリカの中流から上流階級のレディたちの無為と退屈が夫たちの仕事ぶりや滑稽に対比されているが、「黄色い壁紙」のヒロインの神経症はまさに笑ってばかりいられないそのような状況から生まれた。

「黄色い壁紙」のヒロインは神経症の治療ということで医者である夫から静養を命じられ、彼が借りた屋敷につれて行かれる。彼女は書くことも読むことも禁じられ、たっぶり休養するよういわれているが、夫は医者の仕事が忙しく、ときどき様子を見に帰るだけである。ギルマンがこの短編を書いたのは彼女自身結婚して子供を生んでからひどい憂鬱症に悩まされ、当時神経症治療で有名であったS. Weir Mitchellにかかった経験によっている。ミッチェルの治療の基本は“the Rest Care”、すなわち何もせず書かず考えず、知的刺激を避けて栄養たっぶりな食事を十分とり横になる、というものであった。この治療法は当時の女性患者向けの神経症治療としては穏やかなものであったといわれるが、彼の治療を受けた多くの有名人たちのなかでJane Addams, Edith Whartonらはそのやり方に不満を持っている(Golden 144)。ギルマンはそれを最も強く感じた一人として、抗議の意味を込めて「黄色い壁紙」を書いた。彼女の意図は彼女がこの作品を自分の雑誌*The Forerunner*に再掲載したときの目的を語ったところで明らかにされている。“It was not intended to drive people crazy, but to save people from being driven crazy, and it worked” (YW xv).

この時代、女性の神経症やヒステリーが多かったことは1895年フロイトの『ヒステリー症研究』が出たことからもうかがえるが、¹ジェイムズも妹アリスの神経症を通してこのような病気のことを知っていた。ハウエルズの娘もミッチェルの治療を受けている。『ねじの回転』のヒロインの家庭教師の描写にはアリス・ジェイムズの病気を観察したジェイムズの知識が生かされているというOscar Cargillのような見方もある。もっともジェイムズの関心はそのような神経症の治療法の非人間性ではなく、病気が増幅する想像力のゆがみやその原因として疑われる抑圧のほうにある。被害を被った当事者のギルマンに対し、観察者であったジェイムズは一定の距離を保ちやすい。『ねじの回転』は、設定がイギリスの田舎屋敷で時代的にも話の始まりから20年も前に亡くなった人の手記であり、2人の仲介者が間にはいって読者に伝えられる。そこでヒロインの家庭教師をとりまく状況は1890年代当時の社会の女性の状況と無関係ではないのだが、現時点で苦しむ女性の手記となっている「黄色い壁紙」と、同じく一人称の女性の手記でも形式が多少違う『ねじの回転』は、異なった効果をもたらす。ギルマンの「黄色い壁紙」とジェイムズの『ねじの回転』はそれぞれ独立して書かれ、二人の作家の個人的資質や環境を越えて当時の女性のおかれた状況について共通する問題を明らかにすると共に、各々の文学的想像力による異なった対応の可能性を示してくれる。

2

一見「黄色い壁紙」と『ねじの回転』の共通点はわずかである。どちらも女主人公が外界と交流のほとんどない英国または英国風屋敷で過ごすうちに精神の異常を来す。『ねじの回転』では

それは定かではないが、「黄色い壁紙」では結末でヒロインは明らかに狂気に陥っている。共通点はいったんこれで終わりになる。『ねじの回転』のヒロインは自分の家を出て働かねばならない英国の若い家庭教師である。彼女は未熟ながら10才と8才の兄妹の教育をまかされている。一方「黄色い壁紙」のヒロインは世間的に申し分のない医者をもつて、自ら働く必要のない妻である。彼女にはまだ赤ん坊の子供がいるが、神経にさわるので彼女にはその世話はできない。家庭教師は他人にはみえない二人の幽霊と闘って子供たちを守ろうとする。「黄色い壁紙」のヒロインは他人は気づかないが壁紙の向こう側にいるらしい女性を解放してやらねばならないと思いつめる。孤独と狂気の他に二人はどうつながっているといえるだろうか。

『ねじの回転』についてMillicent Bellは、社会階級とジェンダーを意識した作品として解釈している。彼女は1840年以来英国で盛んになった“governess novel” (91) のジャンルを紹介して、Charlotte Brontëの*Jane Eyre*が、通常の家教師もののヒロインのステレオタイプに半ば沿いながらそれからは逸脱した独立精神旺盛なヒロインを創造したことを指摘する (99)。そしてベルはジェームズが『ジェイン・エア』を念頭におき、そこに登場する主人のRochesterと家庭教師Janeを『ねじの回転』の主人と家庭教師に投影させ、雇用主の男性の社会的、経済的、ジェンダー的優位に降伏する家庭教師の心理を描いているという。そして主人の分身を女たらしの下男Peter Quint、さらには子供のMilesに見、ヒロインの分身を前の家庭教師Miss Jesselやマイルズの妹Floraに見て、社会階級とジェンダーの上下関係による抑圧が彼女を狂気寸前に追いやると分析する。ベルの分析は鮮やかであるが、彼女自身も述べているようにこの問題はジェームズが『ねじの回転』を書いた1890年代の英国にもまだ当てはまる問題であった (100)。

ひるがえって「黄色い壁紙」に目を転じると、ここでは少なくともレディと労働者階級の狭間に立たされた家庭教師はみあたらない。ヒロインはアメリカの中流上の階級らしい医者のお嫁である。しかし彼女が夫に対し弱い立場にある女性であることにはかわりはない。ハウエルズは「黄色い壁紙」を1920年に再録するにあたり“horror story” (YW xv) として紹介したが、この短編も確かに女性作家が父権社会の横暴を示すのにしばしば用いたゴシック・ノヴェルの常套手段を利用している。ヒロインがやってきた“A colonial mansion, a hereditary estate” (1) であるこの屋敷は彼女にいわせると“something queer about it” (1) がある。村から3マイルも離れて孤立し、ヒロインが“It makes me think of English place that you read about” (2) という屋敷は18世紀末に英国で流行したゴシック・ノヴェルの舞台となる城につながる。ブロンテも『ジェイン・エア』でソーンフィールド荘の謎にゴシック趣味を利用した。『ねじの回転』ではヒロインはもの寂しい屋敷に到着してまもなく塔の上に人影を認め、“Was there a ‘secret’ at Bly—a mystery of Udolpho or an insane, an unmentionable relative kept in unsuspected confinement?” (17) といふかっている。文章の後半はこの作品と『ジェイン・エア』のつながりを暗示しているが、前半に言及されたAnne Radcliffeの*The Mysteries of Udolpho*はゴシック・ノヴェルの典型として、孤立した古城に幽閉されたうら若い乙女が出てくる。『ねじの回転』の家庭教師同様、「黄色い壁紙」の人妻も自分が連れていかれた屋敷に封建時代の父権制社会の圧

力をおもわず連想する。

ただ「黄色い壁紙」の場合、『ねじの回転』や『ジェイン・エア』と違い、主人公の屋敷への疑問には一つの経済的根拠がある。彼女がまずおかしいと感じるのは“Why should it be let so cheaply?” (1) ということである。彼女の夫は一応の地位と収入はあるが、普通このような広大な屋敷を借りられるはずはなく、安い賃貸料に加え今まで借り手がついていなかったことも謎である。しかし彼女自身は契約に直接かかわらず、夫がすべて仕切っており、夫のジョンは彼女のこだわりは根拠がないと一蹴する。『ジェイン・エア』のジェインとロチェスターや『ねじの回転』の家庭教師と主人の社会階級、経済、ジェンダーの上下関係に対し、「黄色い壁紙」では夫婦間の経済とジェンダーの上下関係が彼女を情報から遠ざけ、夫の従属者の立場に置く。実際、経済的な実権を夫に握られているために結果としてヒロインの神経症が悪化する事態がしばしば起こる。彼女が気に入る黄色い気味悪い壁紙を、夫は最初張り替える意図を示すが、結局3カ月しか借りないのだからもったいないとやめてしまう(5)。また彼女がその部屋の圧迫感に耐えかねて早く引き払うことを申し出ると、彼は契約期間がまだ3週間残っていることをあげて(11) 金銭的損失を惜しんでその願いを聞き入れない。そもそもジョンは契約者としてその屋敷のいわくについて彼女よりは知りうる立場にいるが、故意かどうか彼はその点には触れない。職業柄もあって妻の側にずっとついていなくてもなく、仕事に忙殺され“practical” (1) で金銭にこまかいジョンは、医者ではあるがビジネスマンの性格が強い。

とはいうもののジョンは医者として彼女の身体および精神の管理者である。作品中にもミッチェル博士の名が言及されているが(8)、彼女は徹底して休養しなければならない。「個人的には」(“Personally,”) (2) 彼女はそれに反対であるが、夫の医者としての権威に公然と刃向かうわけにいかない。『ねじの回転』や『ジェイン・エア』の場合、ヒロインたちは主人に対し自分の家庭教師としての義務を遂行することで主人に自分たちの能力を証明し、仕事ぶりを認めてもらう必要があった。それはかなり主人の気まぐれに左右されるとはいえ、自己の能力を発揮する機会ではある。しかし「黄色い壁紙」のヒロインは母親、妻としての義務が果たせないことを重荷に感じているにも関わらず、夫たる主人からの命令は休むことであり、それだけが主人に認められる方法となる。無為に日々を過ごす点で、彼女は家庭教師という職業人よりもっとゴシック・ロマンスの幽閉された姫君に似る。夫の権威は経済、ジェンダーに加えて科学(似非科学というべきか?)の面からも強化される。

ギルマンが、男たち——ヒロインの夫、兄弟、ミッチェル博士——の権威による抑圧が個人的ばかりでなく社会的なレベルで容認されていたことに抗議していたのは間違いない。ヒロインは7月4日の祝日に言及しているが、これ以降彼女の精神状態は悪化するばかりである。ギルマンがわざわざ合衆国の独立記念日に(しかも独立という言葉に言及することなく)触れたのは、全く夫に頼らざるを得ないヒロインの従属状態を当然とする父権社会かつ資本主義社会としてのアメリカへの批判が込められている。作者は6年後に、女も男と対等に経済的自立を得なければならない、という主張を*Women and Economics*で展開することになる。「黄色い壁紙」のジョンは

愛情深げに振る舞ってはいるが、自分の思い通りに妻を管理し、妻の精神的危機に気づかない夫は実際は専制君主的である。

ともあれ、『ねじの回転』と「黄色い壁紙」のヒロインたちは大きな屋敷に取り残されて、それぞれ女性に課せられたヴィクトリア朝的役割に取り組むことになる。ヴィクトリア朝の理想では、夫が外の世界のつきあいをこなす間、妻は家庭を取り仕切り、美德の権化として子供たちを教化する。『ねじの回転』の家庭教師は、主人が家庭にいっさい煩わされないよう子供たちを監督する。もちろん彼女の主人は夫ではなく、子供たちの独身の叔父であり、彼女は雇われ人であって妻のように権威を与えられているわけではない。それでも主人のいないブライの屋敷では彼女が子供たちの教育に関していっさいの責任を負う。彼女はある意味で、子供たちに責任を持つという義務遂行に賭けて狂気に近づく。

一方「黄色い壁紙」のヒロインは子供の世話ができず家事もできない点では母としても妻としても失格である。しかしハウエルズの *A Traveler from Altruria* に登場するレディが断言するように、今時労働者階級より上のクラスで健康な女性なんかいないのが当たり前なので (107)、軽い神経症を病んでいること自体は妻の重大な欠点とも思われない。ヴィクトリア朝の理想の妻としてはむしろ従順であることが重要であり、夫に妻を静養にやるだけの経済力があるときは、弱々しくて夫に頼る妻はそれなりに受け入れられる。「黄色い壁紙」の夫のジョンが知的刺激は彼女の神経に障るから禁止するというのは、女性にもともと精神活動は負担であるという説を述べているに等しい。彼は妻を“little goose” (鶯鳥--gooseには馬鹿という意味もある)、“little girl” と呼び妻を子供扱いする (5, 11)。彼女が言いつけに従って昼間も横になるようになると彼は満足している。妻が子供へ、さらに赤ん坊へと退行することはある意味で夫の意に添うことになる。

「黄色い壁紙」のヒロインが治療に沿って幼児化させられることへの不満を自らなだめる一つの方法は、彼女が子供部屋だと信じている黄色い壁紙の部屋の気味悪さを、自分の子の身代わりとなってがまんしている、と納得することである。彼女は“it is lucky that John kept me here after all, I can stand it so much easier than a baby” (10) という。何の意義ある役割も与えられていない彼女にとって、自分の子供のかわりに犠牲となって困難を堪え忍ぶのは歓迎すべきことである。こうして彼女は夫からも、また自らも幼児化の名分を得たようなものである。

赤ん坊の状態まで退化するということはまた、性を拒否したいという願望から生まれているとも考えられる。黄色い壁紙のおびただしい“fungus” (12, 14) のようなパターンや、壁紙の発するいやな匂いをヒロインは忌み嫌っているが、この無数の増殖する茸 (または菌類、ポリープ) や黄色い染料のしみと悪臭に対する彼女の反発はセックスの行為や生殖への嫌悪を表す、と解釈する批評家も多い。Jeffrey Bermanはヒロインの神経症が赤ん坊が生まれてから起こっていることを指摘してヒロインの性恐怖症説を唱えている (56)。夫のジョンが妻を幼児化したがるのはレディは性欲がない、と決めつけたがるヴィクトリア朝男性の考え方に合致するが、ヒロインの方でも性は疎ましく感じられているのではないか。妻の性は無視されても子供は生み、性差

を理由に夫に従順でなければならないならば、女性であることに彼女は不合理しか見いださない。性を持つことを都合によって無視されたり特別視されるよりは、性の定かでない赤ん坊に返る方を彼女は選ぶ。

もっとも彼女が抑圧したいと願う性を、彼女は獣のように這い廻ることで反対にあからさまにしてしまったともいえる。ジョンが気絶したのは上品でしとやかであるべき妻が壁紙をひきはがして這い廻る姿を見たときである。無垢な赤ん坊としてならば受け入れられる妻が動物にまで退行してはおぞましい。ギルマンは女性が男性と対等であることは信じるフェミニストであるものの、社会ダーウィニズムを信じる人種差別主義者の側面もある (Lane 254)。アフリカ系アメリカ人ら、白人以外の劣等人種は進歩の程度が低く動物に近いが、その分だけ生殖能力は高い、といったでたらめな人種論は19世紀末から20世紀初頭の社会ダーウィニズムでは普通であった。そのような論理に接していたはずの彼女が動物にまで退行する女性の狂気を書いたのは、おもにミッチェル博士の治療法に抗議するためであったろう。しかしヒロインのすさまじい狂気ぶりは、作者の計算した抗議の効果を越えている。ギルマン自身の自らを律し、進歩主義思想を信じて社会を改革したい、という建設的態度を否定するような自己破壊的エネルギーがヒロインの這い廻る姿にはある。壁紙のなかにも秩序を求めたがるヒロインは、実はジョンの数字しか信じない合理主義と全く無縁ではない。ギルマンはミッチェル流の治療法に反対するうちに、父権制社会ばかりでなく彼女の活動の根拠ともなっている進歩思想や理性そのものに刃向かう思いがけない力と出会う。

ギルマンが「黄色い壁紙」を書いたのは1890年、パサデナにおいてである (Lane 124)。日本からの移民がカリフォルニアで“yellow peril”として広く排斥されたのは1900年頃からであるが、その前に中国からの移民がまず“yellow”と呼ばれて排斥の対象となり、1892年には1882年のThe Chinese Exclusion Actがさらに延長された (Jones 263)。1888年からカリフォルニアに移り住んでいたギルマンがアジア系移民排斥運動を全く知らなかったとは考えられない。黄色い壁紙について“great slanting waves of optic horror” (9) であるとか“The color is hideous enough, and unreliable enough, and infuriating enough”とか、そのパターンが“A toadstool in joints, budding and sprouting in endless convolution” (12) という記述は、無意識のうちに後の黄禍論の恐怖に満ちた憎悪を先取りする。ギルマンがおもにプライベートな文章で偏見を漏らしていたのはアフリカ系アメリカ人やユダヤ系に対して、しかも年齢を重ねるにつれてである。また劣等人種の人口が増加して白人を圧倒する恐怖を喧伝する説が大衆に広まったのは20世紀になってからである。しかしギルマンの若いときに書かれたこの短編の黄色い壁紙にたいする生理的嫌悪感には、性と生殖に関するものばかりでなくそれらと連想された人種的恐怖も潜むのではないか。人種差別主義にとって劣等人種の増殖は白人文明を脅かし、コントロール不能に陥る恐れのある不条理なエネルギーである。なぜ作者はこのような連想が働く動物的イメージをヒロインの最後の姿に重ねることになったのか。

「黄色い壁紙」のヒロインの夫は医者であるが、彼女の兄もまた医者で、彼女の症状に対し

ジョンと同じ意見である。一方夫の妹ジュニーはそつなく家事全般をこなし、ヒロインをそれとなく監視する役目を持っている。実際、ジュニーと呼ばれているジェイン(20)は、ジェイン・エアが狂女パーサの放火や傷害事件の際にロチェスターの役立つ助手として活躍したように、ジョンの優秀な助手として兄とよいコンビである。ジョンとジュニーに対し、名無しのヒロインとその兄の関係はほとんど書かれていないが、彼女は黄色い壁紙のおぞましさを述べるときにふと奇妙なたとえを使っている。“it [the wallpaper] sticketh closer than a brother” (7)。これは一般的なたとえとしては常識的でなく、彼女の兄は少なくとも彼女にとって近しいが疎ましい存在であることは推測できる。夫とその妹が結束して実際の合理的な世界を作り、兄もそれを支持しているなかで、ヒロインはナルシスティックとはいわないまでも、homogeneousな自己閉鎖的世界のなかに囲い込まれている。Ann J. Laneは、子供部屋に閉じこもったヒロインの一種の閉所恐怖症を、母の体内から解放されたい胎児のものとして解釈しているが、ジョンとジュニーが管理する英国風屋敷はヒロインとその兄にも快適な、同族的、白人純血主義的な理性の世界のはずだった。彼女も“a defiance of a law” (12)であるようなでたらめなパターンの壁紙を我慢できない理性の持ち主である。ところが理性を信じる作者ギルマンが自らの分身のようなヒロインをたてて父権主義に刃向かううちに、いつのまにかヒロインはパーサと同じく狂女という異端者となって屋根裏部屋に閉じこもってしまう²。

父権の横暴を抗議するはずの作品で、ギルマンは自らの信じる理性の世界が父権社会とつながり、それに抗議することは彼女自身の理性破壊につながりかねないことを明らかにした。ヒロインは気絶した夫をしり目に這い廻っているが、作者のもう一方の分身は、正常なジュニーが助手を務める兄のジョンと同じく気絶してこの結果を認めたくないのである。ミッチェルの安静療法は、女性患者に対し本来女性に知的活動は不自然であるとみなしていることが推測されるが、その偏見はいわゆる劣等民族に対する人種差別論と同種の似非科学性がある。ギルマンは時には人種差別主義の不当さを拒否する力を持っていたが(Lane 256)、彼女がミッチェルの療法を徹底して追及すれば自らの進歩主義思想に潜む社会ダーウィニズムの欠陥に突き当たらざるをえない。そしてその過程では彼女が理性で管理するはずの性の奔放なエネルギーもかいま見える。「黄色い壁紙」のもたらす恐怖感は、作者自身が予期せず探り当てた自らの存在の不可解さ、彼女の世界の秩序崩壊の危機によるところが大きい。ギルマンの作品は普通、女性の地位向上の希望を感じさせる楽観的な結末を迎えることが多いが、この作品は異質である。彼女はこの作品以降、長い間フィクションを書かなかったが、それはレインが指摘するように(もっともレインはギルマンの父親憎悪とその乗り越えという精神分析的解釈をしているが)、この作品が彼女自身をおびえさせたからかも知れない(Lane 127)。

外界と遮断された世界におかれて期待された役割を演じるなかで自己崩壊の危機に直面するのは『ねじの回転』の家庭教師も同じである。しかしこの作品では作者は最初から彼女との距離を意識している。少なくとも作品の開始時点で作者が主人公と自らを重ね合わせ、同じ目的の戦いをしてしていると信じていた「黄色い壁紙」とは異なっている。『ねじの回転』は家庭教師の手記には

いるまで時間がかかる。まず最初の語り手とダグラスによる導入の後、この手記がすでに死亡した家庭教師がダグラスに託し、さらにダグラスが死ぬ前に語り手に託し、語り手が筆記し直したものだということが説明される。この念入りな導入部を付けた理由の一つは、ジェイムズが一人称の女性の語り手として語るための準備期間が必要だったということであろう。

David McWhirterはジェイムズの芸術家観がwriter/authorの二重性を持ち、“author”が建築的、包括的な構造をめざす父性的性格を持つのに対し、“writer”の方は構造の統一性よりもディテールにこだわり、自由に想像力を展開させていく母性的資質を持つと述べる (NE 129)。そして『ねじの回転』ではジェイムズは家庭教師に“writer”としての“feminine textuality” (139)を展開させ、正常と認められる基準以外は受け入れない父権的権威主義ではみえてこないものを見ようとした (138) と論じる。

確かに「黄色い壁紙」のジョンのように数字で説明できるものしか信じない合理的思考に対し、彼の妻のようにこの屋敷には何かおかしいところがある、という感性は幽霊を語るためには必要である。McWhirterがどのような意味での女性性、厳密なカテゴリー化をすり抜けて展開する意識の流動性をジェイムズはあえて用いている。ジョンは妻が病気になる理由など何もない、よって彼女は病気ではない、と結論する。自分が必要と認める時以外は決して意味を求めない思考法に対し、彼の妻や『ねじの回転』の家庭教師は、混沌しかないようにみえるところにも意味を熱心に追い求める。もちろん彼女たちも自分たちが読み込みたい意味を探し求める。壁紙に秩序を求めるジョンの妻ばかりでなく、家庭教師も子供を悪から守る大義名分を必要としている。家庭教師自身は「黄色い壁紙」のヒロインよりずっと父権制社会に忠実であろうとしたのである。しかし意味の増殖が自分たちが望んでいたはずのものを越えて広がっていくとき、彼女たちはそれが手に負えず、自分の存在を脅かす恐れがあるにも関わらず、合理性の安全圏内にとどまらずに追求する。

家庭教師はマイルズを最後まで追いつめながら、ひょっとして彼は罪がないのではないかと、してもしそうなならば自分は何か、と自問する。彼女は意味決定権を自分においてはいない。『ねじの回転』で家庭教師がマイルズの死体を抱き抱えているのに気づいたとき、彼女が向き合うのは意味不決定性である。“Peter Quint—you devil” (88) という一見家庭教師には決定的と思える、幽霊との交信を告白したように見えるマイルズという言葉も、その解釈は多義的で曖昧である。そしてもはや彼女はマイルズに真の意味を問いたたすことはできない。彼女は主人から決して手紙を書いて自分を煩わせたりしないよう厳命されていた。それでも問題が非常に錯綜した時点で彼女はついに主人に手紙を書いて指示を仰ぐ、と決心する。しかし結局その手紙は出されないまま事件は結末を迎える。主人とは連絡できず、校長 (head-master) は手紙でマイルズ放校の具体的理由を述べず、主人 (master) のかわりに意味を解きあかしてくれるはずのマイルズ坊ちゃん (Master Miles) は死ぬ。家庭教師は面接の時から主人に夢中になり、彼に認められたい一心で屋敷での義務遂行に邁進していた節があるが、彼女が読み込んだ意味を最終的には認めてくれる権威というものはない。行為の意味の不決定性を自ら引き受けなければならないことを家庭教師は

思い知る。絶対的知識を与えてくれる主人や父権の権威は存在しない。

「黄色い壁紙」のヒロインは彼女にとって一つの意味を獲得した。檻のなかに閉じこめられた女性を解放する必要があるということは、そこに自分の姿を読み込んだ点では正しかった。屋敷の外にも無数の這い廻る女たちがいる、という指摘も、ヒロインが社会のなかでの女性の地位を直観的に感じとったのだ、といえる。しかし彼女が檻から解放した女性と自らを重ね合わせ、部屋のなかに閉じこもって堂々めぐりするとき、彼女の意味にも硬直化がおこっている。兄妹が構成する合理的同族的父権社会を内側から崩壊させ、ヴィジョンとしては外界へ出て這う女性を見るが、ヒロインが屋敷内部で狂女としてとどまることは、ギルマン自身にヒロインを解き放つことへの恐れがどこかに存在していたととれる。家庭教師はマイルズの死体に直面して、意味を支える絶対的な権威はない、という認識におびえるが、「黄色い壁紙」の主人は気絶しただけである。しっかり者の妹ジェインが駆けつければジョンは回復し、ヒロインは注意深く幽閉されるであろう。E.A.Poeの場合のように理性への信頼が根本的に崩れ、死んで棺桶に納められたはずの地下室から妹がやってきて双子の兄を道連れに屋敷全体が倒壊するようなアッシャー家の悲劇は避けられる。

ギルマンは彼女の分身というべきヒロインによってミッチェル博士の療法に抗議し、父権制社会の横暴を訴えたが、彼女の批判の鋭さは社会ダーウィニズムにつながる進歩思想を信じる彼女自身の理性にまで向けられそうになる。しかし気絶した夫のジョンの体をまたいでいく程度の勝利をヒロインは獲得したものの狂気に陥り、それ以上話は続かない。気絶した男と這い廻る女はそれぞれ別個に放置されて終わる。ギルマンは彼女自身のジェンダーとしての男性性と直面することを辛くも免れる。それに対しジェイムズは父権制社会に従順な女性を語りの主体に据え、その社会の絶対的意味の誘惑とその幻滅を彼女に体験させて、父権の権威が支える秩序や合理性、意味の明示性に疑問を呈している。

しかし『ねじの回転』の最終的な意味の保留は必ずしも読者に歓迎されない。ヒロインに不利な証拠、有利な証拠が交錯するなか、読者は彼女に対する信頼と不信の間を揺れ動く。読者はヒロインの語りの世界から一步外へ出て客観的なパースペクティヴを得たいという欲望に駆られるが、そのとき読者は自らの予断と偏見に従って家庭教師をカテゴリー化する可能性がある。たとえば主人とのロマンスを夢見る若い女性が性欲を抑圧された状態でヒステリー症状に陥ったのだというEdmund Wilsonの説（“The Ambiguity of Henry James”）から鈍感な人間には見えない悪の汚染を見抜き、子供の魂を守る孤独な戦いを挑んだ聖女というRobert Heilmanの説（“The Freudian Reading of The Turn of the Screw”）にいたるまで、家庭教師が狂気に陥ったかどうかの解釈はその分析者の女性観とも関連する。Shoshana Felmanが指摘するとおり、³読者は自ら抑圧した心理や社会構造の無意識を文学テキストに転移させて分析してしまう恐れがあり、誰しも全く外部の客観世界に立つことはできない。意味を確定したい、という欲望に駆られて家庭教師を断罪することは、彼女が最後に自分への根本的疑問を問いかけたのを無視して読者自身、自らの世界観に影響されて絶対的評価を下してしまうことになる。

『ねじの回転』は意味の誘惑に満ちている。読者は家庭教師に代わって意味を追求し、また家庭教師の行為を評価して父権制社会の権威の象徴である主人の役割を演じたい誘惑に駆られる。絶対的意味を決定してしまう、もしくは決定権は自分にあるとする行為を男性的、その断定を嫌って流動的な意味を追う行為を女性的とするならば、家庭教師、そして読者はその両方を経験する。解釈行為の男性性と女性性は家庭教師と主人、家庭教師とマイルズ、前の家庭教師ミス・ジェッセルと主人の悪の分身のような下男ピーター・クウィントの関係のように、セクシュアルな意味あいを帯びて作品のなかでは幾重にも反射増幅されている。

さらに男性性と女性性のせめぎあいは性的なからみばかりでなく、一つのテキストを男性女性のどちらが所有するかという形でも示されている。時間的な経過でいうと、家庭教師の話はまず彼女の口からダグラス自身に語られたのであり、その後彼女が手記として書いたものを幽霊話の席上ダグラスが皆に読み聞かせ、さらにダグラスが死ぬ前に最初の語り手に彼女の手記を送り、この語り手がそれを書き写したものを今読者は読んでいる。一つの話が女性と男性の声および筆を経て繰り返されたことになる。ただしこのような複雑な操作のなかでやはり女性家庭教師がオリジナルな発話者である。『ねじの回転』はジェイムズが秘書に口述筆記させた最初の作品の一つといわれる (Bell 100)。家庭教師の手記というフィクションを作者ジェイムズが男の秘書にタイプを打たせているとき、そこに発せられるジェイムズの声は家庭教師のと重なるのだろうか、ダグラスの声と重なるのだろうか。それともあくまで男性性と女性性を統合する作家ジェイムズの肉声なのか。作家としてはいっさいを掌握する芸術家でありたいところだが、口述筆記中、ジェイムズは語る主体のジェンダーの混乱を経験しはしなかっただろうか。

女性の差別的待遇改善という具体的な問題に取り組むギルマンはフィクションを書くことによって思いがけず父権社会の構造が自分自身の理性にまで及んでいるかも知れないことに気づかされるが、フィクションを書くことを職業とし、一日の長があったジェイムズは、ジェンダーが一人の人間もしくはテキストのなかで一つだけではありえないことをあらかじめ気づいていた。これら二つの作品においてヒロインはどちらも書くことを禁じられている。「黄色い壁紙」のヒロインは夫によってものを書くことそのものを禁じられている。『ねじの回転』の家庭教師は主人に手紙を書いて煩わせることを禁じられている。女性が作者となって書くことが父権社会を転覆させるだけの破壊力を持ちうることに父権を代表するこれらの作品の人物は無意識のうちに気づいていたのかも知れない。それぞれの作家はヒロインに書かせることによって少なくともその社会をぐらつかせたのである。

注

- ¹ 当時の女性の神経症とその治療の意味をフェミニズム批評から記述したものとしてはElaine Showalterの *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980* (New York: Penguin, 1985) を参照のこと。
- ² Gilbert/Gubarは *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* のなかで「黄色い壁紙」のヒロインの狂気が勝利であると考ええる。
- ³ フェルマンの『ねじの回転』論は今までのこの作品についての批評の批評家自身の転移を鋭く指摘している。

Works Cited

- Bell, Millicent. "Class, Sex, and the Victorian Governess: James's *The Turn of the Screw*." *New Essays on "Daisy Miller" and The Turn of the Screw*. Ed. Vivian R. Pollak. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 91-119.
- Berman, Jeffrey. "The Unrestrul Cure: Charlotte Perkins Gilman and "The Yellow Paper."" Ed. Sheryl L. Meyering, *Charlotte Perkins Gilman: The Woman and Her Work*. Ann Arbor: UMI ResearchP, 1989.
- Cargill, Oscar. "*The Turn of the Screw* and Alice James." Ed. Robert Kimbrough, *The Turn of the Screw*. New York: W.W.Norton, 1966. 145-65.
- Felman, Shoshana. "Turning the Screw of Interpretation." Ed. Shoshana Felman, *Literature and Psychoanalysis: The Question of Reading: Otherwise*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980. 94-207.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Gilman, Charlotte Perkins. *The Yellow Wallpaper and Other Writings*. Intro. Lynne Sharon Schwartz. New York: Bantam, 1989.
- . *Women and Economics*. Ed. Carl Degler. New York: Harper & Row, 1966.
- Golden, Catherine. "'Overwriting' the Rest Cure: Charlotte Perkins Gilman's Literary Escape from S.Weir Mitchell's Fictionalization of Women." *Critical Essays on Charlotte Perkins Gilman*. Ed. Joanne B.Karpinski. New York: G.K.Hall, 1992. 144-158.
- Hedges, Elaine R. "'Out at Last'? 'The Yellow Wallpaper' after Two Decades of Feminist Criticism." *Critical Essays on Charlotte Perkins Gilman*. Ed. Joanne B.Karpinski. New York: G.K.Hall, 1992. 222-33.
- Heilman, Robert. "The Freudian Reading of *The Turn of the Screw*." *The Turn of the Screw*. Ed. Robert Kimbrough. New York: W.W.Norton, 1966. 214-28.
- Howells, William Dean. *A Traveler from Altruria*. New York: Harper & Brothers, 1894.
- James, Henry. *The Turn of the Screw*. Ed. Robert Kimbrough. New York: W.W.Norton, 1966.
- . *The Art of the Novel*. Intro. Richard Blackmur. New York: Charles Scribner's Sons, 1962.
- Jones, Maldwyn Allen. *American Immigration*. Chicago: U of Chicago P, 1960.
- Karpinski, Joanne B. "When the Marriage of True Minds Admits Impediments: Charlotte Perkins Gilman and William Dean Howells." *Critical Essays on Charlotte Perkins Gilman*. Ed. Joanne

- B.Karpinski. New York: G.K.Hall, 1992. 202-21.
- Lane, Ann J. *To "Herland" and Beyond: The Life and Work of Charlotte Perkins Gilman*. Charlottesville: UP of Virginia, 1990.
- McWhieter, David. "In the 'Other House' of Fiction: Writing, Authority, and Femininity in *The Turn of the Screw*." James's *The Turn of the Screw*." *New Essays on Daisy Miller and The Turn of the Screw*. Ed. Vivian R. Pollak. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 121-48.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980*. New York: Penguin, 1985.
- Wilson, Edmund. "The Ambiguity of Henry James." Ed. Gerald Willen. *A Casebook on Henry James's The Turn of the Screw*. New York: Thomas Crowell, 1969. 115-53.
- Woolfe, Virginia. "Henry James's Ghosts." *The Turn of the Screw*. Ed. Robert Kimbrough. New York: W.W.Norton, 1966. 179.
- スプリンガー、マーレーン。『アメリカ文学のなかの女性』小林富久子訳。東京：成文堂、1985。